

# 石垣の真実

文〃有栖川有栖  
Arisugawa Alice

画〃浅妻健司

豊臣秀吉が大阪城を創建した当時の石垣を掘り出し、一般公開するためのプロジェクトが進んでいる。今年の三月末の時点で〈太閤なにわの夢募金〉に二・四億円（目標は五億円）が集まったことで実現の目途が立ち、令和に入って早々から工事が始まった。

私は同募金のサポーターとして名前を連ねているので、うれしさと安堵を同時に覚えている。いささか地味な事業に思えるせいなのか、募金の目標額にはまだ遠いが。

大阪城は〈大坂夏の陣〉で落城した際に焼失し、二代将軍・徳川秀忠の命で再建されたものも失われ、昭和の初めに鉄筋コンクリート造り・エレベーター完備の天守が復元された——という事はよく知られている。現在の天守ができたのがいわゆる〈大正時代〉で、個人と法人による莫大な募金だけで建てられたことを知る人も多い。

しかし、「天守閣は近代建築やけど、石垣は豊臣秀吉が築いた当時のもの」と思い込んでいる大阪市民はたくさんいる。と言うよりも、大阪城に格別の興味を持っている人でなければ、当たり前のように「石垣は太閤さんが造ったまま」と今でも

信じているだろう。

そんな思い込みが学術的に覆されたのは、昭和三十四（一九五九）年のこと。地下およそ十メートルに焼けた痕がついた石垣があるのが見つかり、それこそが秀吉の築いたものだった。現在の石垣は徳川家によって城が再建される時に造り直されたものであることが明らかになったのだ。

正直なところ、「嫌な事実を掘り出してくれたな」と思う。二代目大阪城が初代をスケールアップさせたものだったと伝わっているのは仕方がないとしても（どうせ現存していないし）、あの素晴らしい石垣までもがメイド・イン・徳川だったと聞けば、秀吉好きで家康（ひいては徳川）嫌いの大阪人としては愉快ではない。

この事実が公にされたのは翌三十五年になってから。発掘されたものを精査する時間を要したのだろうが、「えー、あまり面白くないことが判明しまして……」と関係者が発表をためらったのでは、とあらぬ空想をしてしまう。

徳川家は、「お前たちが好きな豊臣家は滅んだぞもう痕跡すらない。これからは徳川の世だ」ということを大坂の民衆にアピールするため、オリジ

ナルの石垣を埋めた上に壮麗な二代目大阪城を建てたわけだ。意図はよく理解できるし、実際、当時は大きなインパクトをもたらしたに違いない。

しかし、それから幾星霜。大阪人は事実を忘れてしまい、太閤さんの石垣は昭和三十四年まで地下で人知れず眠り続ける……。

近年、「実は、大阪城の石垣は徳川製」は、豆知識のような広がり方をしていた。先日日本の城を特集したNHKの番組で紹介され、スタジオのコメントーターの反応は「へえ、事実はそうだったのか。なるほど、徳川家が自分の力をアピールするためにねえ」というものだった。事実ではある。

太閤さんの石垣展示館について伝えるニュース（産経WEST 二〇一九年五月二日付）には、こんな一文があった。

〈大阪城は「豊臣秀吉の城」という印象が強く、現存する石垣を含めて豊臣時代の遺構とする間違ったイメージが観光客だけでなく市民の間にも根強く残っている。このため市は「豊臣の石垣」を掘り起こすことで、2つの城の存在を同時に見せることを計画〉。

そう、多くの市民の認識は事実に対し、間違っていた。だが、しかし——。

〈間違ったイメージが観光客だけでなく市民の間にも根強く残っている〉のは何故か？ 特に、ずーっと大阪城を「わが街の天下の名城」と仰い

できた人々が「あの立派な石垣を造った人」をどうして取り違えてきたのかについて思いを致さないのは知的怠惰である。

難問でもなく、考えれば答えはすぐに判る。徳川家の渾身のデモンストレーションに大阪人が畏れ入らず、それが彼らの心にまったく響かなかったから。

江戸時代の大坂の繁栄は、秀吉が築いた礎の上に徳川幕府が様々な厚遇をしたおかげであるが、「大坂の陣の時の勝ち方が汚いわな」「家康はえげつない」「太閤さん、好きや。秀頼さん、かわいそう」というイメージをどうしても払拭できず、挙句に「石垣は太閤さんが造ったまま」と勘違いするに至った。徳川の不人気ぶりはあっぱれだ。

現存する石垣を築いたのが徳川家だというのが〈事実〉であるならば、「太閤さんが造った」は事実を超えた一つの〈真実〉とも言えるのではないか。石垣展示館で私たちは事実と向き合う。とても結構なことだが、それが永きにわたって忘れられていた事実も併せて伝えていくべきだろう。真実のために。

ありすがわ・ありす 作家。1959年大阪府大阪市生まれ。同志社大学卒業後、書店勤務を経て、1989年『月光ゲーム』で推理小説作家としてデビュー。第56回日本推理作家協会賞を受賞した『マレー鉄道謎』など、著書多数。作品の舞台が関西に設定されることも多く、大阪・上町台地を舞台にした『幻坂』は、第5回大阪ほんま本大賞を受賞した。

